

自閉症児の物品授受場面における「ありがとう」の促進に関する研究(2)

○矢代 久美子
(須恵第一小学校)
キーワード: 自閉症児 「ありがとう」 言語の機能

藤金 倫徳
(福岡教育大学)

I. はじめに

障害のある子どもの指導では、正の強化刺激の獲得確率を高めるという視点から要求言語の指導(藤金, 2001)が行われてきた。しかし子どもの要求が実現されるかどうかは、他者の要求充足行動が生起するか否かに依存していることから、他者の要求充足行動へ強化刺激を提示できることが望ましい。矢代ら(2020)はこの視点から、自閉症の男児に「ありがとう」の形成を試みた。一定の成果はあったが、次の2点が課題となった。1つは、対象児の「ありがとう」が、訓練者の「はい、どうぞ」に強く統制されている可能性がある点であった。2点目は、訓練者が要求物の供給を遅延させた場合には、対象児は100%「ありがとう」を自発した点、すなわち「ありがとう」が要求言語として機能している可能性がある点であった。

1点目については、日常場面で他者に物品等を渡す際、何らかの言語的キューがあるほうが自然であると考え、本研究では問題としないこととした。2点目については、その問題の発生の機序が用いた訓練手続きの中にあったのではないかと考えられる。すなわち矢代ら(2020)の研究では、訓練者は要求物を対象児の手のひらに置いたものの、対象児が要求物にアクセスできないよう手のひらをブロックした。このブロックはフェイドアウトしたものの、当初は要求物へのアクセスが遮断され、しかもその状態で生じた「ありがとう」が、要求物へのアクセスで強化されるという要求と同じ随伴性が成立したためだと考えられる。

そこで本研究では、「ありがとう」と「ちょうだい」の使用を差別化させること、すなわち物品へのアクセスが制限された状況では「ちょうだい」を、物品が入手できた状態では「ありがとう」を使用できるようにすることを目的とした。

矢代ら(2020)では、対象児が要求物を口に運びながら、または消費してから「ありがとう」を自発する場面が数回観察されていた。このことから、対象児の「ありがとう」は要求言語としてのみ機能しているわけではなく、要求物の入手を弁別刺激として生起する本来の「ありがとう」の機能も帯びていると考えられる。つまり、要求物へのアクセスが遮断された場面と、要求物が入手できた場面とは、完全には刺激等価ではないことが予測される。そこで本研究では、それぞれの場面に対応した言語反応を、分化強化操作により成立させることを試みた。本研究ではさらにその結果から、対象児の「ありがとう」の刺激統制の様相について改めて検討した。

II. 方法

1. 対象児: 知的障害のある自閉症と診断されている男児であった(特別支援学校小学部1年生)。

2. 手続き: 訓練は原則として週に1回、40分程度行った。対象児が選択要求した物品を訓練者が充足した。

① ベースライン測定(1S~5S)(Sはセッション、以下同): 物品を充足する際、訓練者は「はい、どうぞ」を提示した後に、要求物の供給を遅延する試行と、即座に要求物を供給する試行を設けた。

② 訓練(6S~16S): 前述した手続きで、対象児が「ちょうだい」と「ありがとう」を差別的に使用できるようになる訓練を行った。要求物の供給を遅延した場合に「ありがとう」が生じた場合には、訓練者は「ちょうだい」の音声モデルを提示し対象児に模倣させた。供給時に「ありがとう」が生起しない場合は、特に介入を行わなかった。また8Sの訓練終了後、対象児が遊んでいる場面で般化を測定した。さらに14Sでは、対象児の要求物を「はい、どうぞ」とともに他のスタッフに手渡す試行を行った。

3. 倫理的配慮: 訓練の方向性、手続き等については保護者に説明し、同意を得た。また訓練結果を公表することについても同意を得た。

III. 結果および考察

要求物を供給した際の「ありがとう」の正反応率は平均60%台で推移した(Fig.1)。一方で供給時に「ちょうだい」を自発したのは極僅かであり、すぐに自己修正をした。

一方、要求物の供給を遅延した際のベースラインでは2S以外、100%誤反応である「ありがとう」が生じた(Fig.2)。訓練開始以降、「ちょうだい」の正反応率は上昇し、同時に「ありがとう」の生起率は低下した。

前述したように、仮に要求物へのアクセスが遮断された状態

と入手できた状態が刺激等価であるとする、要求物の供給を遅延した場面で「ちょうだい」の生起率が高まった時、供給の場面でも「ちょうだい」の生起率が高まるはずである。しかし Fig.1 よりそのような傾向は伺えないことから、対象児の「ありがとう」は、要求言語としてのみ機能していたのではない可能性が高い、すなわち双方の状態は刺激等価にはなっていないと考えられる。訓練の結果、要求物へのアクセスが遮断された状態と、入手できた状態のそれぞれが弁別刺激として機能し始めたことにより、「ありがとう」と「ちょうだい」の言語の機能が分化したと考えられる。

また8Sの場面般化測定により、場面般化の成立も確認された。他方14Sで対象児の要求物を「はい、どうぞ」とともに他のスタッフに供給した試行では、対象児の「ありがとう」は生起しなかった。このことから対象児の「ありがとう」を制御しているのは単に「はい、どうぞ」だけではなく、要求物が充足されたという状態であると考えられる。

本研究の結果、対象児の「ありがとう」は、概ね60%以上の生起率で推移するようになった。今後はこの生起率について社会的比較を行うなどにより、社会的妥当性(Kazdin, 1982)を検討し、さらにこの生起率で他者の要求充足行動が維持できるかどうかを検討することが課題となる。

(YASHIRO Kumiko and FUJIKANE Michinori)

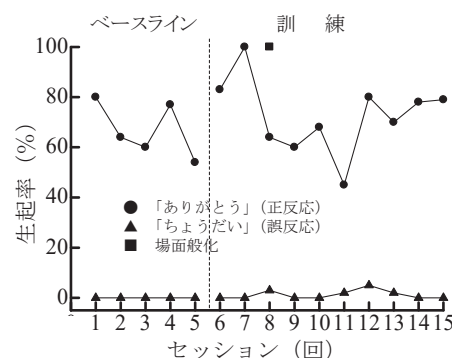


Fig.1 要求物供給時の生起率

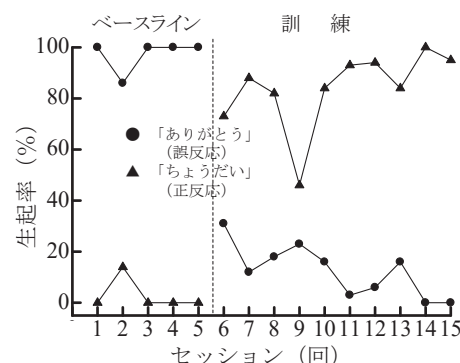


Fig.2 要求物供給遅延時の生起率